

欲生心の象徴的自覚

4

本多弘之

honda hiroyuki

浄土教の基本用語である「本願」という言葉も、「浄土」という場所的概念も、もとはと言えば大乘仏道の根本問題を、いかに一切衆生の共通関心と結びつけ、仏教の人間解放の原理を広く具体化できるかという人類的課題の展開だったのであろう。親鸞聖人が龍樹菩薩を浄土真宗の第一祖に押さえてこられたのは、単に彼が大乘仏教の八宗の祖師だからということではない。龍樹の戲論寂滅の論理と八不中道の思想を、一切の菩薩の求道心に

応える「不退転」の確立という具体的課題の前に、真に求道における必然性として易行不退が必要であることを開示し、「安楽国」に生れた人として「証歡喜地生安樂（歡喜地を証して、安樂に生ぜん）」（正信偈）と伝えられた人だったからに相違ない。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」（草枕）とは、漱石の名言だが、この人間世界は苦悩と不安の忍土であ

る。この人生において、安心を確立する要求に応えようとする求道心に、平等に一切衆生を解放しようという課題を荷負したのが大乘仏教であった。個人体験として安心するというのでなく、衆生である限りの有限な存在を、無限なる大慈悲による救済という発想で、この大難関を乗り越えようとしたのである。生命としてこの世にあるかぎり、「生老病死」の苦悩の事実を避けることができない。しかも、この苦悩を超える要求に応えるべく、



「大涅槃」という概念が掘り下げられた。それは、単に個人が苦悩を感じなくなり、死に帰着するような「寂滅」ではなく、そこに帰ることによって個我への執着を超えて、一切衆生と共に、止まることなく大安心を生きていこうという課題の展開と、展望をもったものなのである。これは明らかに、この世の苦悩を生きるレベルを何らかの意味で突破した超越的関心を開く問題であろう。しかしそれは、この世を豎に超えた（人間の努力の蓄積の方向で）いわば宇宙空間に逃避するような関心ではなく、苦悩の海の底に沈殿していくような深みに、苦悩をも厭われないような願心の湧き出す源泉を見いだすという方向だと思ふのである。

無我の喜びをいかに衆生に説き伝えるか。いわゆる対機説法の教主が、衆生のそれぞれの宿業因縁に対応しながら、それを乗り越越える機縁を言語化していったときに、どの場面にも立ち会いながら、その説かれた思想によって回心することができなかったのが、阿難尊者であつたらしい。釈尊が一番近い存在でありながら、求道心の展開からするならば遠い存在だったのである。『大無量寿経』序分によれば、その阿難が釈尊の「光顔巍巍」たる相好に初めて驚嘆したとされている。ここを親鸞聖人は釈尊出世の正意の証明だと読み取られた。このときの釈尊は、「今」、「今

と繰り返して語られる大現在の安住に立つておられた。その内面には「仏と仏と相念じたまえり」と言われる、諸仏との同心の喜びがあつたとされる。

仏の所証は平等法界であると言う。無我の精神界には、個我の差異が消え去る智慧があるからである。この大いなる平等法界に触れた存在が仏陀であるとされる。そのとき、大乘の仏道を証明する諸仏とはなんであるのか。「諸」と言われるのは、個体の個性を残しているところに、それぞれ異なつた仏名がつけられるからであろう。証果たる法界からすれば平等であるが、それぞれ異なつた名がつくのはどうしてか。それは因位の求道過程が異なるからだと言われる。例えば、阿弥陀仏は因位の法蔵願心にあつて、別意の弘願をもつことにおいて、独自の「阿弥陀」なる名をもつとされるのである。

考えてみれば、因位の願が異なるのは、因位のとときの宿業因縁の苦悩の情況が異なるからである。この異なりを超えて、畢竟平等の智慧を開くことこそ、大乘仏教の課題なのである。このことを、いわば真に深海の底まで見据えて、一切衆生を平等に摂取する大悲を「本願」とすることに、一切諸仏が賛同してくれたということ、を、「仏仏相念」として表現し、それによってこそ自己の願心が普遍の大道たることを得るとして、「諸仏称名」（諸

仏に称揚讃嘆される）の願いをもって自己自身を成立させる願としたのが阿弥陀如来の因位である。

親鸞聖人は、「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまいて」と語ることが、かたちない一如とは「大涅槃」の異名なのである。つまり、真の寂滅涅槃は、無碍に法界を表現して、大悲のはたらきを起す源泉のことだと了解しておられるのであろう。

しかし、問題はその大悲を受けとめる濁世の凡夫の側にある。一切の経験を三界のなかのみ有為の転変の状態）でしか了解できない凡夫にとつては、涅槃から立ち上がるという表現を勝過三界道（経験世界を超えたところ）からの発信とは、決して理解しないからである。そこに、有限な凡夫が大悲を矮小化して小慈小悲の内容としてしまうという大問題が出てしまうのである。つまり、この課題を、生前には体験できるはずがないから、死後に得る利益だと受けとめてしまうのである。生死は、三界の内にある。生死を突破することは、大悲からの無限のはたらきに触れることなのである。三界を超えることは、有限から無限への方向を転じて、無限から有限への大悲のはたらきを信ずる外にはないのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長